① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第12巻　第2号　1967年2月25日　大町山岳博物館

スキーヤーのマナー

最近各地より訪れるスキーヤーの群に戦前派の我々には目をみはるものがある。

この人々をみるにこれは〳〵と、思われるものが多くみられる。

積雪の多い一本道を宿へ向うスキー客、これに対向して駅へ向う通勤通学者、当然何れかが道をゆづらねばならぬ、道をゆづる。声もなく会釈もなく又挨拶もなく行くスキーヤー、家に入る。帽子をとるでもなく、リュックについた雪をはらうでもない。

ぬれた靴下もそのまゝ部屋へあがる。

最後の人は戸をしめるでもなく、スキーヤーも寒かろう、家人も寒かろう。

食事となっても依然として帽子は頭にのっている。帽子は一つのアクセサリーと解しているか？入浴となる、最初の二、三人も入れば湯面は低下、次の人は入れなくなり不平がでる、点火風呂を加熱する、時計の針は零時近くをさしている。長かるべき冬の夜も遠慮なくすぎる。前記は一例にすぎない。

私達日常生活を送る上には、それに適応した、それ〴〵のマナーが必要だ。これに加え礼儀作法も当然必要となってくる。

遠方よりはるばる来たスキーヤーをせめて同じ屋根の下に一夜を暖かく、そしてたのしい雰囲気の中につつんであげたい。

マナー礼儀作法をかねそなえた諸作をみてその人の人格を、家庭の躾を痛く感ずる。アルピニストにはアルピニストの、ビジネスにはビジネスのマナーがある。

我々の職場に於いて忘れてはならぬマナーを身につけ、訪れる入館者に好感を持たれるべく努力したい

（館長　成沢祥人）

信州植物寸景（一）

横内　斉

信州の植物界ほど興味のある所は少ない。「所変れば品変る」でどこの土地に行っても、おのおの特徴があるが、身びいきではないが私共の生れた信州程、その植物界が変化に富んでいる所は少ないと思う。その第一は種類が豊富だということである。これは寒帯に共通するチョウノスケソウから、熱帯に産するミズスギまで生育し、温帯に本拠をもつ種類が非常に多いなどで、その第二は各分布系統のものが入り混っていることで、亜熱帯系のハスノハイチゴやヒトツバタゴなどが産し、寒地系の一般には高山植物といわれている寒地植物である、ハイマツやイワウメなどが各高山頂に産し、関東地域に生育するタマアジサイやマメザクラなどが分布して来ており日本海地域に分布の領域をもつユキツバキやクロバナヒキオコシなどが侵入して来ており本県とその関係の土地のみに見られるフォッサマグナ地域系のミサヤマチャヒキやヒメスミレサイシンなどが多産しておるなどである。

その三は、特産種が多いことで、キソキイチゴやシナノスミレ、タデスミレなどはほんの一例であり、私の発見した新種、新変種、新変形だけでも三十四種に及んでいる。例えばノリクラナナカマド、コウテンシダレ、トガクシサワギキョウなどはその例である。その四は隔離分布している珍らしい種が、見られることで坂城町岩鼻のモイワナズナや菅平のツキヌキソウなどである。その五は大陸との共通種が多いことで、ケショウヤナギやホロムイソウやチシマウスバスミレなどがかぞえられる、その六は分布の限界を示している種が数多くみられることで、彼のハイマツの南限は皆信州内にある。オオバタチツボスミレの南限、タカネシダの北限などはそのよい例である。

その七は大陸との共通種が多いことで、ケショウヤナギは樺太、東シベリア、オホーツク沿岸地方、北鮮と共通であり、タカネシダは、ヒマラヤの山地と共通であるなどで、かぞえあげると際限もない。きわめて種類は少ないが、純海岸性植物であるクロマツやハマエンドウも点描的に入っている。この外に帰化植物という一群の外国種も土着している。これらの植物の合計は、種、変種、変形、品種までをかぞえると、杉本順一氏によると三八五〇の多きに達するという。以下数回にわたって、思い出すままに主なものを記してみよう。順序はないので、そのつもりでお読み下さることをお願いする。大体高山のものはぬいてある。

タカネシダ Polytilum Lachennse Bedome おしだ科のこのシダは、八ケ岳や南アルプスの高山頂の寒原に産する。私は大正十二年八月初め、南アルプスで採って喜んだが、三年前八ケ岳連峯の硫黄岳ジョーゴの滝の少し右側の岩壁に得た。武田久吉博士はすでに明治三十五年に硫黄岳で得ている。根茎はやや太く、側羽片を落した葉の中軸を残している、密に鱗片がある、丈は八～二〇cmで、前記した山の高山帯の岩石地に生える。中国からヒマラヤにわたって分布する。高山植物としては、唯一のもので、これは日本植物の起源が、ヒマラヤから南支との共通種があることを裏書するもので、貴重な資料である。これはおそらく初めは南アルプスに分布し、八ケ岳に渡ったものと思う。

モイワナズナ Draba sachalinensis Trautvetter あぶらな科多年草で、星毛が密に生える。花茎は高さ一〇～二五cm、下半部に二～四枚の葉をつける、ロゼット葉は倒さ皮針形で少し鋸歯がある。花は白色で大形、なかなか気品がある。初め北海道札幌の郊外の藻岩山で発見されたのでこの名がある。これがとんで我が信州の埴科と上田の境の鼠の岩鼻と、ここから斜東南の小県郡泉田半過の岩鼻に産する。何れも流紋岩の断崖絶壁である。この岩壁は層向が同一方向である所から往昔はつづいていたものであろう。それが千曲の浸蝕によって断たれて二ヵ所にわかれて生育していると考えられる。樺太、北海道、信州と遠く離れて分布する。所謂隔離分布は興味のある問題である。私は昭和三十九年五月、天皇、皇后両陛下御来県のみぎり、その生品をお目にかけて説明申し上げまた標本を献上申し上げた。

シダレエノキ Celtis sinensis Persoon var. Japonica Nakai form. pendula (Miyoshi) Honda にれ科　エノキの枝垂れの品種、その枝垂れぶりは、彼のシダレヤナギようになよ〳〵とした優雅さはなく、シダレグリのように規矩としたものでもなく、その中間をゆく、本品はきわめて稀にて、最初発見された小県郡東内村（旧村名）薬師堂の前のものは、国の天然記念物として保護され、二番目のものは、西筑摩郡山口村の諏訪社境内に合併された粟島神社の社前にある。今から四十余年前のことで当時村民の語る所によれば、田の土堤にあったのを樹形が異状なので移植したという。稀重という点では、ハナノキやシダレグリやニドグリの比ではない。近頃松本市徒士町の民家に植えられたものを一株見出したと聞く。

ユキツバキ Camellia rusticana Honda つばき科　初めサルイワツバキという名で発表されたが、今はこの名に変った。まことにその生育地そのものずばりでよい名だ。花は赤色で、ほとんど離弁花のように平開する。葉形は多様できめ手はない。雄シベが美しい黄褐色を呈している。ヤブツバキと簡単に区別するには、その葉脈の毛だ。本種には白い軟毛が長い間ついている。本州の日本海沿岸地方の山地に生え、幹は積雪のため傾斜上している。本県では下水内郡のほとんど全域、東南限は下水内郡栄村の小赤沢と上ノ原の中間の雑木林中に一ヶ所、下高井郡の野沢温泉村の毛無山の麓、前坂の上の谷が東限、この東隣りは飯山市の端穂区であるが、ここの小菅神社の神様は、この木の芽で目をつかれたので、この種はその領域内に生育させないという伝説があり、その裏付のように分布しない、上水内郡では野尻湖周辺山地にはずっとあるが、その西では黒姫山の柏原登山道わきに二ヶ所あり、これより西には産しない。北安曇郡では小谷村の山地で、姫川の右岸で真木（まき）の峠にあるのが南限で、左岸では中土駅から左りの山地に登り、神社があるが、この神域内になかなか多い。この北側の低い所に小川が流れているが、この上流に二ヶ所産する。まれに白色花や多弁花のものがある。園芸品には本種からでた珍稀品がある。

タデスミレ Viola Thibaudievi Franchet et Savatier

すみれ科　葉形がタデに似ているという所からそのものずばりの名だ、茎は高さ四〇cm近くにもなる。スミレの仲間としてはなかなかよく伸びる。花は白色で小形、稀産種で、本県東筑摩郡本郷村のある山の一部と小県郡東部町の烏帽子岳の一角のみに産する。日本特産であり、勿論長野県特産でもある。朝鮮にコウライタデスミレがある。

タゲリを追って

長沢修介

冬になると積雪の多い大町地方では、冬鳥で水辺に集る種類を見ることのできるのはわずかの数種に過ぎない。そのほとんどは積雪に共って雪のない地へと渡り去ってしまい本当に冬の欠乏期を越すのは更に限られた留鳥の数種を数えるのみであろう。そんな数少ない鳥達の姿を求めて、毎年冬になると犀川へ出掛ける。特に安曇平のうちでは明科町の水産試験場の辺りがこれらの水辺の鳥の最も良い越冬地のようで比較的数多くのものを見かけることができる。

この例年の明科通いが始ったのはもとを正すと、タゲリ探しから始ったことである。今から約一〇年程以前の十一月、タゲリの姿を求めて池田町内鎌から明科へと一日中広い田圃の中を歩いたのが始めである。もっともこの時は一日中重いカメラをかついで歩いていただけで何も見ることができず、犀川迄も行きつくことができなかった。今から考えると無駄な探し方をしたものであるが、田圃一つ一つを克明に探して歩いたものだった。その頃はまだタゲリなるものの実物を見たこともなければ、その鳥の性質も本で得た位の知識しか持ち合せていなかったので無理もない。以前はこの辺りの湿田へ多数が飛来したという人の話しからこの地への通いが始ったのであるが、その冬はその後二度程出掛たがついに姿を見ることができず、土地の人に聞いても近年はほとんど飛来しないとのこと、それでもとわずかな望みを託して次の年の秋も出掛たがついにこの年もタゲリには出会うことができなかった。その代り、明科水産試験場附近の川原に越冬する漂鳥や冬鳥の多くの姿を見て、冬の水辺の鳥の生態を大いに勉強した。

以後毎年二、三回はこの地へ出掛けては冬の水辺の鳥の生態をカメラに収め、彼等の生活を見るのがたのしみになった。

その後も池田町内鎌地籍へは何回も足を運んだが、間もなく湿田一帯は開発され、湿田であった所がすっかりなくなってしまい、沼地もなくなったので、タゲリの飛来する場所はすっかり姿を消してしまい、もうタゲリはこの地では見られぬものとあきらめていた。

以後も、明科の犀川へは毎年出掛け、イカルチドリやタヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、などの姿をカメラに収め、トビとカラスの空中戦をながめては彼らの冬の生活にふれていたが、タゲリはすっかりあきらめた形になっていた。

所が三十八年の十二月に不意にタゲリとめぐり会うチャンスがやってきた。

この日はいつものように明科水産試験場裏附近の水鳥達の姿を半日ながめ、更に上流に一キロほどさかのぼって、砂利を採集したあとの砂山に群るハシボソガラスの姿を双眼鏡でながめて、肌を刺すような川風にすっかり冷えきって、もうそろそろ帰ろうかと思っていた時、ピィーウィと一声鳴いてゆったりとした飛び方で、翼の巾が広く先の円い、カラス位の大きさの鳥が一羽、二〇〇㍍位離れた水辺に降りた。

トビにしては下降のしかたが変っているし、タカの類ではなさそうだがと急いで双眼鏡をのぞくと、特徴のある細い冠毛、胸から脊は光沢のある美しい緑黒色、脚の赤褐色まぎれもないタゲリだ!!

何年もこの姿のみを求めて無駄足を踏んだにしてはあまりにも不意で、予期せぬめぐり逢いであった。とはいってもその時の感慨はただ双眼鏡をのぞくだけでカメラを取るのも忘れてしまっていた。やがて水辺をゆっくりと歩き始めたのに気がついて、五〇〇ミリの望遠レンズをカメラに取りつけるのももどかしく、ファインダーをのぞいたが遠い／あまりにも遠すぎて点にしか入らない。冠毛はおろか姿さえも良く識別できない。何とかして近寄りたいものだと思っても広い川原のこと、何一つ身を隠すものがない。仕方ないからじりじりと近寄ってみる。五㍍位寄っては一枚、又五㍍位寄っては一枚、祈る様な気持で近寄る。しかし警戒心の強いこの鳥には一〇〇㍍も歩かないうちに感付かれてしまい更に一〇〇㍍も遠くへ飛ばれてしまった。あきらめ切れず重いカメラをかついで寄ってみる。しかし今度はもっと遠くへ飛ばれ、はるか上流へと飛び去ってしまった。

この鳥の性質からして一羽ということはない。必ず近くに群がいるはずと寒風に吹かれながら約二キロ上流へ歩いてみると果して約二〇羽程の少群に出逢ったが、カメラを向けるどころか三〇〇米以内へは絶対に近寄せてくれない。その上、雪さえ舞ってきてついにこの日は再度を約して帰ることにした。

二週間程してやっと時間を作り再度この地を訪れたが、この群はやはり人を近付けず、一度飛び立つと一キロ位飛んでしまい、ついに一枚も写すことができず、徒労に終ってしまった。この年はあと二度程出掛たがその度に翻弄されたのみで一枚も写すことができなかった。

翌年の冬、前年の失敗から今度はカメラ二台を二人でかついで出掛たが、こんな時には皮肉にも一日中重いカメラをかついで歩いたのみで一羽のタゲリにも出逢わずに終ってしまった。この年はどうしたものかついに一羽も見かけることができずに終ってしまった。

以後、毎年冬になると出掛けるがこの大きな群には出逢わなくなった。まして近年、全ての仕事は機械化が進み、砂利採集にもブルトーザー、パワーシャベルが出現し、静かだった川の瀬音も、彼等の楽園も、騒音とすさまじい砂利トラの往来と化してしまった。

この冬になって出掛てみると、以前タゲリの多くいた辺りはすっかり砂利トラの領分と化し、わずかカラスとトビのみとなってしまったのには大いに落胆させられた。

それでもわずかの望みを捨て切れず上流へ二キロ程歩いてみると、これはどうしたことか三〇羽程の群を見かけ、大いに喜んだ。

この時も双眼鏡での確認のみに終ったが、彼等の極度に神経質に人の姿を気にしていることは確実であった。又一度飛び立つと一キロから二キロ位遠くへ飛ぶようであった。

先日、今度は上流の方か歩いてみて、どの辺までが彼等の縄張りであるか確かめてみようと、梓橋駅から下車して梓川を下って間もなく三羽を目撃した。これらの事から推定するに、彼等の一群は大体明科町辺から梓川、奈良井川の合流点附近を根拠にして越冬地としているようである。

（山博調査員）

川辺にたたずむタゲリ

今冬スキー拾い歩記（1）

長沢武

どっと来て後の続かない民宿客

大糸線沿線の、ことしの正月スキー景気は他のスキー村と同じく、ベトナム景気が影響し、昨年後半期の市場の好響をかって、きょ年の正月より大部伸びたようである。

毎年そうであるが、暮れから正月のスキー景気は、十二月のボーナスの出具合いに左右され、ボーナスが決ると予約もドッと増える

今シーズンは、雪が早く降ったのと、景気の上昇で、シーズン入りは例年になく早かった。八方尾根を持つ細野部落では、いつも十二月二十日頃からお手伝いさんを頼むことにしているが、今年の冬は十二月五日頃からお客がぽつ〳〵入り始め、十日頃から本格的営業に入った旅館が多く、準備やお手伝いさんも間に合わず、大騒ぎであった。

しかし、これは大型スキー場のこと、中小スキー場の民宿旅館はいつもながらの、暮れの二十九日から正月三日間だけが満員で、五日過ぎれば人っ子一人いなく、閑古鳥が鳴くといった処が多く、観光という流行病に取り付かれ、泥沼に足を踏み入れた零細農家のやりくりは前途多難の観がかくせない。

保健所、税務署、火事、泥棒

旅館経営ということは非常にむつかしい。職業別収益統計でも旅館業は最低クラスで資本家は旅館のみには絶対手を出さないという実際、民宿旅館をみても、建物や設備は年々デラックス化しているが、これは好き好んでのことではなく、隣近所が良くなれば、サービス、宣伝と共に、家の構えも大切な旅館商売であれば、来ていただくお客様の手前こちらも自然良くせざるを得ないのである。それに法律の改正で、許可条件がきびしくなり、旅館業者にとって今や保健所は世の中の何よりもコワイものになった。調理室も耐火、防水材を使用し、流しはステレス製三漕、窓には換気栓、ホコリの溜るよう棚や戸棚は一斉禁止し、食品庫を作り、調理台には殺菌灯付きマナ板を用意し、冷蔵庫、消毒液付き手洗いを調理室内に設けよ、ということで、流し台だけでも六万円もするから調理室を例にしても二十万円位最低かけなくては旅館の許可をもらえないことになった。毎年数回廻ってくる保健所員や県衛生部の機動隊の抜き打ち調査に、皆センセンキョーキョーとし、「何時までに改築します」という誓約書を書くのである。

年間延べ百人か二百人しか泊めない民宿でも一流旅館と同じ法律に従って作らねばならないから大変なことである。

次に、最近とくに民宿の関心を引いて来たものに、火災保険がある。ことしも正月白馬山麓で、スキー客四十余名宿泊中、乾燥室の加熱から民宿一軒が全焼したが借金や先祖からの田畑を手放してこれまで造り上げた施設と寝具、什器を一瞬にして灰にした上、宿泊客全員のスキー、スキー靴、カメラなどまで全部弁償するということはどえらいことで身代限りともなりかねない。

乾燥室を夜びいて燃やし、炬燵を使用し布団の上でタバコを吸う民宿旅館は、ほんとうに火災の危険度が高い。一泊六百円や七百円で泊めた上に火事を出しお客に弁償までしたのでは、おそろしくて民宿など始められないそこでなけなしの金をたゝいて火災保険に加入する家がぐんぐんと増えたのである。

三番目にはスキーの盗難が上げられよう。

正月や連休の日は終日有線放送でスキー盗難の知らせがかならずというくらいにある。こんなことは数年前まで、どこか他所の国のことのように聞いていたが、この二〜三年いよ〳〵白馬山麓でも流行しだした。

最近のスキーヤーの仕度は、ショーウインドのマネキンのように、色あざやかな高級品を身につけるようになった。スキーズボン一つ例にとっても、一本一万二千円のものがどん〳〵出るというし、スキーも国産品ではもの足りず、一台五〜六万円もするクナイセル、ヘッド、フィッシャーといった外国製のスキーを持つ者が多くなった。

スキー場の昼食時や、旅館の夜の乾燥室はこれらのスキーを含め数百台のスキーが林立しているので、盗難騒ぎもしょっちゅうである。素朴な人情、家庭的雰囲気のサービスをモットーとする民宿にとって、盗難こそ迷惑至極である。せっかくのサービスが、また楽しいスキーの旅が、一辺にアダとなったり、いやな思い出と化してしまう。旅に来てまでドロボーしたり、されたりするとは、まったく日本の国も住みにくゝなったし、つまらぬ人間が製造されることになったものだ。スキーを楽しみに来てスキーを盗むなんてヤローは首の骨でも折って死んでしまえ！と言いたくなる。さて世の中はおもしろいもの、ミサイルができるとすぐに迎撃用ミサイルが開発されるが、スキーも盗難が流行すると、頭のいいのがいてその予防法を考え出すもので、まだ知らない人もあろかと思うので、こゝでちょっと紹介しておこう。その一つは、市販の盗難予防マークを買ってスキーに貼りつける法。これにはナンバーが入っていて一たん貼ったらぜったいにとれないことになっている。その次の方法は元手いらずの珍手であるが、ただし二人以上の仲間が必要である。方法はいとも簡単で、昼食などでスキーを脱いでそこを離れる場合、友達と片方づつスキーを交換して離れ〳〵に立てゝおくのである。こうすると、いくら高価なスキーでも片方づつのちぐはぐでは盗んでみてもしょうがないから誰も手を出さないという次第で、教えられゝば「ナーンダ」ということになるが、これは妙手で、手間も金もかゝらないので私は何時も実行しているが、お陰で、いまだかって一回も盗られたことがない。

（白馬村公民館主事）

スキーヤーの貸切バスでにぎわう四谷駅前

表紙説明

中綱湖の穴釣り　撮影　小日向　吉光

山と博物館　第12巻第2号
一九六七年二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL(大町)二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部